

女子大学生が快適に過ごせるキャンパスデザインの研究 (2)

Campus design for women's university student

堀場 愛弓¹, 中川 麻子¹, 大澤 清二¹, 森田 舞², 嶺野 あゆみ²

Ayumi Horiba¹, Asako Nakagawa¹, Seiji Osawa¹, Mai Morita², and Ayumi Mineno²

¹大妻女子大学家政学部被服学科, ²株式会社岡村製作所フューチャーワークスタイル戦略部

キーワード：女子大学生, キャンパスデザイン, 空間デザイン

Key words : Women's university student, Campus design, Space design

1. 研究目的

大学生の多くは魅力的で快適なキャンパスで学ぶことを期待しており, 年々その要望は高まっている. 文部科学省による「戦略的なキャンパスマスタープランづくりの手引き」(平成 22 年度)の提案以降, 全国の大学キャンパス改善が進められている. 近年では私立大学の施設拡充が話題となり, 国公立大学でもキャンパス改善に取り組むなど, 社会的関心も高い. しかし, こうした提案や実例は, 男女共学大学を対象としたものであり, 女子大学に通う学生の要望や心理・身体的特徴に適したものとは言い難い. 将来, 女性の社会的活躍が期待される中, 優れた女性リーダー育成を担う女子大学にとって, 女子大学生が快適に過ごせるキャンパスデザインの検討は急務である.

本研究は, 平成 28 年度から進めている. 1 年目の平成 28 年度では, 大妻女子大学を対象として, 都市型キャンパスの例として千代田キャンパスを, 郊外型キャンパスの例として多摩キャンパスを取り上げ, それぞれに行動調査および問題点把握を行った. さらに両キャンパスの学生合計 240 名のアンケート調査から, 千代田キャンパスでは学食や授業時間以外の過ごし方について不満が多いのに対して, 多摩キャンパスでは施設への不満が強いなど, キャンパスによって学生要望が大きく異なることが明らかとなった. これらの結果から, 郊外型キャンパスと都市型キャンパスでは異なるキャンパスデザインが必要であること, また女子大学特有の要望を踏まえた独自のキャンパスデザインが必要であることを導き出した.

本研究は前年度の研究のさらなる発展とし, 都市型・郊外型キャンパスを持つ女子大学に向けたキャンパスデザインについての調査を行い, 基礎

的研究としてまとめ, 新たな女子大学キャンパスのデザイン提案を行うことを目的とした.

2. 研究実施内容

本研究は 5 期に分けて調査・研究を行った.

第 1 期では, 前年度のアンケートを精査し, 都市型・郊外型キャンパス共に最も多く挙げられた不満点である「学食」「オープンスペース」, また, 郊外型キャンパス特有の「キャンパスに誇れるものが欲しい」という意見に着目した. そこからさらに具体的な問題点を探るため, 大妻女子大学千代田キャンパス・多摩キャンパスの学生, 他大学学生計 330 名にアンケート調査を実施した. 併せて多摩キャンパス学生 20 名にはインタビュー調査も行った.

第 2 期では, 学食に関する具体的な改善案を検討した. 第 1 期で行ったアンケートでは, 学食における不満として「いつも混んでいる」「利用したい人が座れるようにしてほしい」「少人数席を増やしてほしい」など, 昼休みの混雑や座席数不足の不満が 50.6%と過半数を占めた (図 1).

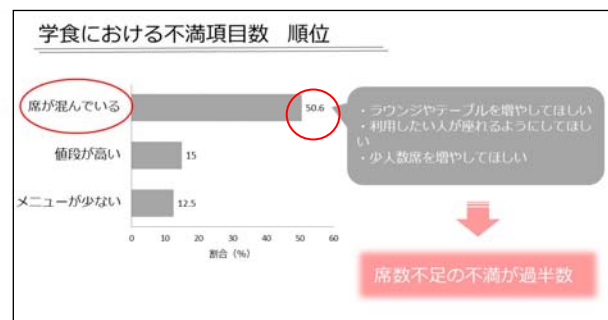


図 1. 学食における不満項目

この原因を明らかにするため、大妻女子大学学食「コタカフェ」の現場調査を行った。現場調査により、昼食時の混雑の原因として①食券販売機の列とメニュー見本を見る人の列が重なり、動線が混乱していること、②長時間の利用による回転率の低さ、③荷物の占有による座席のロス、が挙げられた。これらの問題を改善するため、①動線の変更、②スピーディー席の設置と座席の増設、③荷物カゴの設置を提案し、実施した。

まず動線の変更では、メニュー見本を見る学生と入り口の券売機に並ぶ学生が入り乱れている状態であったため(図2)、メニュー見本の位置を入り口の広いスペースへと変更した。これにより、メニューを見てから券売機に並ぶ動線が整理され、入り口の混雑を解消することができた(図3)。

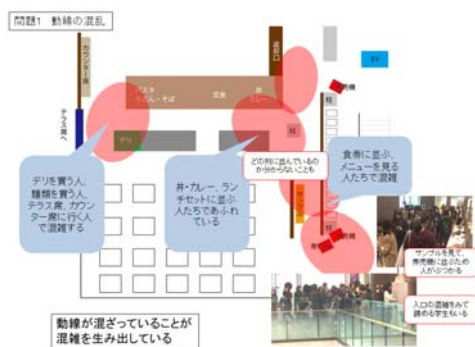


図 2. 動線の混乱

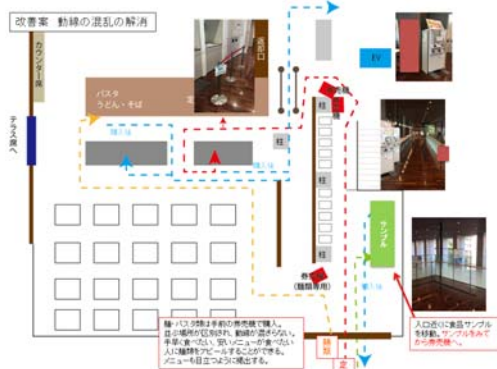


図 3. 動線の改善

スピーディー席の設置では、1人でも利用しやすいよう2人席を増やし、POPによる呼びかけを行った。その結果、すばやく食事をしたい学生の利用が増え、お昼休みの50分間で座席が2回転し、回転率の向上へと繋がった(図4)。

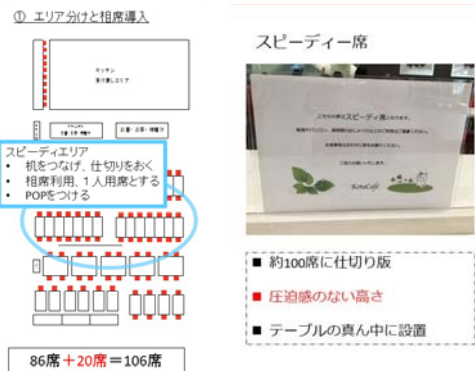


図 4. スピーディー席の設置

さらに、荷物かごを設置することによって、荷物による席の占有をなくし、座席数の確保につながった。

第3期では、オープンスペースに関する不満として、「飲食できるスペースが少ない」といった意見が多くみられたため、学内の飲食スペースの確保と図書館の活用を目的とした「学内ブックカフェ」の提案を行った。本学の図書館は、近年利用率が低迷しており、ブックカフェの形態を活用することで飲食スペースの不足と図書館の利用率の問題の2つを解消できるのではないかと考えた。

はじめに都内のブックカフェ5店舗と他大学のブックカフェ3店舗を調査し、本学でもブックカフェが受け入れられるのかを把握するため、実際に学生によるブックカフェイベントを実施した。

このイベントは、本学学生が「本学に設置するならどのようなブックカフェがあるとよいか」をテーマに、カフェのレイアウトや設置する本、メニューなどを考え、2日間にわたって実施した(図5)。



図 5. 図書館でのブックカフェの様子

イベントの参加者からは、「気軽に本を読みながら飲食できる空間が良い」「大学に実際にブックカフェがあったらよい」などの「ブックカフェを求める声」が多く挙げられた。また、ブックカフェ

を図書館に設置することで、学内の飲食スペースの確保と学食の混雑緩和、さらには図書館利用の活性化が期待できた。

第4期では、郊外型キャンパスの活性化のための新提案を行った。第1期で行った本学多摩キャンパスの学生20名に対するインタビューでは、都市型キャンパスの不満とは異なり、「授業時間外に過ごすスペースがない」「キャンパスの周りに何もない」「キャンパスに誇れるものがほしい」といった意見が多く挙げられた。この結果を踏まえ、多くの学生が求めている居場所の提案が急務であると考え、「コミュニケーションスペース」と地域の人との交流と健康増進ができ、大学周辺にはない「トレーニングジム」の提案を学生視点から行った。

コミュニケーションスペースでは、そこに人が集まりやすい仕掛けや雰囲気づくりを通じて、大学内の学生同士の交流、大学と地域の人々との交流を促すことを主とし、「通路やエレベーターホールのコミュニケーションスペース」「多言語コミュニケーションカフェ」「地域に開かれたコミュニティカフェ」を提案した。

トレーニングジムでは、きれいで清潔であること、メイクスペースなどのアメニティ空間の充実など、女子大学生の要望を取り入れたジムの提案した。郊外型キャンパスでは、このような学生が気軽に利用しやすく、また、地域の人にも気軽に利用してもらえる空間を提案することで、地域と大学の活性化につながることを導き出した。

第5期では、2年間の研究の総括として第2期

～4期の提案について具体的なCGによるデザインを行い、女子大学生が快適に過ごせるキャンパスデザインおよび女子大学生にとって魅力的な郊外型キャンパスのデザインの活用案の提案と総括を行った。

3. まとめと今後の課題

女子大学のキャンパスにおいて学生が快適に過ごすためには、授業時間以外に過ごすスペースや学食などのアメニティ空間に特化して整備することが重要だと考えられる。郊外から都心回帰が進む現在、都市型キャンパスでは学生人数が増加し、学内スペースの不足が問題となっている。その反面、郊外型キャンパスでは学生数が減少し、キャンパス独自の魅力を求める声が年々高まっている。今年度の研究では、都市型キャンパスの学食の混雑解消やブックカフェを用いた飲食スペースの提案、郊外型キャンパスへのコミュニケーションカフェやトレーニングジムの提案など、それぞれの学生要望に対応したデザイン提案を行うことができた。

さらに、本研究で本学・他大学ともに学食に関する要望が多いことが明らかとなり、大学のキャンパスアメニティ向上には、学食の充実が必要であることがわかった。郊外型キャンパスにおいても大学の学食が地域コミュニケーション空間の拠点として十分に活用できると考えられ、今後は学食の問題に注視し、女子大学生が快適に過ごせるキャンパスデザインを行っていく必要がある。